

学ぶ姿勢

Learning Attitude

佐藤実芳（Miyoshi SATO）

はじめに

子ども達の教育を考える際、高学歴志向が強い現在の日本では、偏差値の高い志望校に合格することを中心に考える傾向が強いと感じられる。子ども達にとって、志望校に合格することは大切なことである。しかしそれが学びの終着点ではなく、志望校に合格した後の人生の歩みが更に重要である。

学校教育に関して学習指導と並んで重要な意義をもつものが、生徒指導である。2010年に文部科学省が策定した『生徒指導提要』では、その意義について「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」であり、「児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」と記されている。生徒指導とは、児童・生徒の問題行動を改めて教員の指導に従わせるのではなく、児童・生徒の社会性を育み積極的に行動することができる人間に成長させることを目指す活動なのである。そしてその最終目標は、児童・生徒の自己実現であり、自らを指導することができる自己指導能力の育成である。人工知能社会の到来を目前に控えた今日、その社会を力強く生き抜くためには、偏差値で評価される知的能力以上に求められるのが、社会性であり、自己指導能力である。

将来社会人として困ることがない人間に育てることが、教育の役割である。社会人になれば、偏差値では評価されなくなる。高学歴ニートの存在が、そのことを証明している。社会人になるまでに、社会への適応力、何事に対しても「学ぶ姿勢」を獲得することが必要である。「学ぶ姿勢」があれば、全人格的な学びが可能になり、それによりどのような困難な課題も乗り越えることができるからである。

現在の学校教育こそ、子ども達を自立した社会人として育てる教育的視点が重要である。本稿では、武蔵野東学園の創設者である北原キヨの教育、愛知県立東郷高等学校初代校長の酒向健の教育、宮崎県小林市の小・中学校での立腰教育を中心とした教育から、子ども達を自立した社会人に育てるには、どのような教育が必要なのかを検討する。

1. 武蔵野東学園

武蔵野東学園は、北原勝平・北原キヨ夫妻が1964年に開園した幼稚園が始まりで、その後小学校、中学校、高等専修学校、教育センターを開設した。同学園の健常児と自閉症児¹⁾の「混合教育」²⁾と、自閉症児に対する「生活療法」の教育実践は、海外でも高く評価され、アメリ

カのマサチューセッツ州ボストン市には、同学園のボストン東スクールがある。健常児には障害のある友達と共に学園生活を送ることが他者にやさしい「心の教育」実践となり、自閉症児には健常児から受ける適度な刺激により社会への自立に向けた高い教育効果をあげている。

（１）北原キヨ（1925年 - 1989年）

北原キヨは、1941年4月に国民学校の教員になった後、1947年度からは小学校教員として学校教育に携わった。その後結婚を機に教職を離れたが、夫が経営していた工場が公害問題から経営困難になった際、何か人から喜ばれるような仕事がしたいという夫婦の思いから、夫である北原勝平が妻の望む幼稚園を開園する道を選んだ。そして1964年11月に、文部省が学校法人・武蔵野東幼稚園の設置を認可した。

北原キヨは、戦中、戦後の教員経験から、21世紀に活躍する人間を育てるという極めて高い意識を持っていた。その背景となっているのが、戦前・戦中・戦後を生きてきた自らの経験である。戦前の教育には誤りもあったが、戦前の教育が育てた日本人の「努力、根気のよさ、辛抱強さ、勤勉」がなければ、戦後日本の経済復興は実現しなかったであろうという思いがあった。過保護の環境で育ち、排他的な考え方しかすることができない人間では、国際人としては通用しないからである。そして、国際人として必要な自立心や独立心を育てるのは、高等学校や大学では手遅れで、幼稚園や小学校での教育が決め手となる。そのような思いで、幼稚園から出発して小学校を開校した。北原キヨが主張する幼稚園での早期教育は、決して小学校の前倒し教育ではなく「遊び」に徹していた。子どもには子どもの生きがいがあるという。

子どもの希望、すなわち生きがいと言いかえてもよいと思いますが、生きがいは大人だけがもっているわけではありません。子どもには子どもの、それなりの生きがいがあります。小さな幼稚園の子どもには年相応の気負いがあり、小学生には小学生としての生きがい、中学生には大きな社会の出発点に向かって、全生涯を通した門出としての希望があります。³⁾

北原キヨは子どもがもって生まれた無限の能力を育てる学校教育を理想としていた。そして日本の国づくりに大きな力となったと松下村塾を理想とし、手作り教育を取り入れた。その一つがスキー教室をはじめとする体験学習である。日本の各地の特徴を社会科の教科書を使って教室の中で教えていても、子ども達が真に理解できるはずがない。その場に行き、さまざまな体験をしてこそ、子どもたちの真の理解につながるのである。また、全寮制の教育を理想とし、宿泊学習を数多く実施していた。小学校から自主学習の習慣を身に付けさせることと、労をいとわず行う労作を重視したのも、北原キヨの教育の特徴である。

（２）武蔵野東幼稚園

北原キヨは、「幼稚園教育を一年早くやることは、大げさにいえば、大学を二年分余分に学ぶより効果があるということ、早期教育一年の価値は大学教育二年分に相当する価値がある」

⁴⁾と早期教育の価値を認識して、幼稚園を開園した。それは、小学校教員の経験から、就学前

教育が子どもの発達に極めて重要であると考えていたからである。自分が理想とする幼稚園教育を実現するために、どのような幼稚園にするのかを考え抜いて作り上げたのが武蔵野東幼稚園であった。幼児には学習意欲があるわけではないので、子ども達に魅力的な体験を提供することができる豊かな環境を整える必要があると考え、最高の設備を整えた幼稚園を作り上げた。

園の教育目標には、子どもの心と身体を健やかにたくましく育てたいという思いを込めて、「みんななかよし」、「すなおなこころ」、「こんきのよさ」とした。北原キヨは、まず健康な身体づくりからはじめ、健全な心を育てることを考えていた。よい生活習慣を身に付けさせ、幼児体育・音楽・造形の指導を中心にした楽しい幼稚園生活を園児に満喫させて、学校教育を受けるのに必要な根気のよさを育てて卒園させることを目指した。

日本には四季があり、豊かな自然がある。子どもはその「自然」や「季節」から多くを体験的に学んで大人に成長していく。年齢が幼いほど適応力に乏しいため、幼稚園では園児に「自然」や「季節」を軸として、それらを中心に生活に適応させていく力を育てることが大切であると、北原キヨは考えていた。この考え方から生まれたのが「生活保育」である。

北原キヨが目指した幼稚園教育は、小学校教育を先取りする教育ではなく、これから力強く成長する子どもに必要な土台作りであった。北原キヨは、21世紀を生きる日本人が国際人になるために最も必要なのが自立心、独立心、円満な人格であると考えていた。そしてそれは、大学生活で身に付くようなものではなく、3・4歳から小学校での教育において基礎が作られてこそ、その後豊かに育つと考えていた。

『武蔵野東学園物語』には、1968年に公開保育を実施した際、北原キヨが、「幼児体育」は体力の向上と強健な精神力の涵養に効果的であるとその重要性を説き、それから全国的にこの言葉が広まったと記してある。北原キヨの幼稚園教育は、「遊び」が中心で、子どもが楽しく遊ぶことにより、子どもの才能が将来開花するための土台を作り上げることを目指した早期教育であった。

（3）生活療法

北原キヨが小学校の教員を始めた頃は、どのクラスにも障害児が在籍していたため、障害児（自閉症児）を幼稚園に違和感なく受け入れた。

自閉症児の場合、健常児に比べて環境に対する適応力が弱い。そのため、多くの刺激を与える必要がある。しかし、教育の考え方は健常児と同じであった。幼稚園に入園した自閉症児が言葉を話せるようになるなど症状が改善されたことで、「生活保育」が自閉症児の指導法としても有効であることが明らかになり、「生活療法」と呼ばれるようになった。

北原キヨは、生活療法の基本を発達と考え、「^{ママ}生の子どもを教育の中心において、その発達を基本に据え、そこから子どもの発達を総合的にとらえ、促していく方法」⁵⁾と説明している。実際生活の様子から、子どもの興味や関心、身体的な動き、行動力、知的能力などの発達がどのような状態にあるのかを総合的に把握した上で、当該年齢の子どもが目指す発達を可能にするのに相応しい教育や訓練を行うのが、生活療法である。言葉を話すことができない自閉症児

に、言葉の訓練だけをしても真の教育効果を期待することはできない。言葉は生活の中でこそ使う意味があるので、子どもの総合的な発達を促進し生活の質を高めることで自然と言葉が出てくるのである。生活療法はマニュアル化された指導ではなく、目前にいる一人ひとりの子どもと真剣に向き合う手作り教育であった。

（４）混合教育

「自閉症児は、健常児との混合教育で良くなる」というのが、北原キヨの信念であった。幼稚園の場合、学習ではなく遊びが中心であるため、自閉症児が健常児と同じ活動をしやすい。自閉症児は早期教育で症状が改善すると共に、健常児からの刺激を受けて更に発達することができる。

他方、健常児は自閉症児と接することで、違いを個性として自然に受け入れることができる。そしてこの経験から、相手の立場に立って考えることが自ずとできるようになる。それは園訓である「みんななかよし」に繋がるものであり、卒園後も周囲の人と暖かい人間関係を築くことができ、今後多様化する社会で生きていく子どもたちの大きな財産となると考えられる。

（５）武蔵野東小学校

北原キヨは幼稚園から小学校までの早期教育の重要性を感じていた。そこで 1977 年、武蔵野東小学校を開校した。そして 21 世紀を生きる国際人に必要な「自立心、独立心あるいは円満な人格」を育てるため、武蔵野東小学校の教育理念を、「強く、正しく、美しく」と表現した。強い体と何事にも積極的に取り組める行動力と勇気があり、自ら正しい知識を学んで身に付け、まことの友愛の心に満ちている子どもの育成を目指した。それが現在でも同校の教育目標となっている。幼稚園同様、小学校も自閉症児のための学校とは考えていなかった。

（６）武蔵野東中学校

北原キヨには、武蔵野東小学校を開校した時から、中学校を開校したいという願いがあった。それは小学校開校当初、中学校がなかったため、中学受験を希望する児童に対応した受験対策の教育をせざるをえなかったからである。

小学校を開校したときから、小学校においては受験にわずらわされずに、健康で、豊かな子ども時代を保障する教育を行いたいと考えてきました。そして、この教育をさらに義務教育の中学校へとつないで、子どもから大人への転換の教育—幼稚園・小学校のまとめであると同時に社会への出発の教育—を子どもたちの中に遺してやりたいというのが、私の常々描いていた夢でした。⁶⁾

北原キヨは、小学校教育が基本であり、「子どもの心を完璧に開き、意欲をもりたて、様々の体験を与えることによって、子ども時代を十分に補償」すべきであると考えていた。北原キ

ヨは、『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』で、武蔵野東中学校を以下のように記している。

この中学校は、自閉症児にとっては社会自立への出発のための基盤の教育となり、ともに学ぶ健康な子どもたちにとっては、友愛の心に結ばれた「東っ子」の人格を完成して大空に飛び立ち、今後の高等学校・大学及び社会にめざす目標を自らの力で定め、決断できる義務教育の完成の学園となります。⁷⁾

北原キヨは、校訓を知性（高き知性）、根気（粘り強い心と体）、友愛（暖かき友愛）とした。表現は多少異なるが、その精神は武蔵野東小学校と同じである。心の栄養は知識であり、それは自分の能力を将来発揮する専門の基礎となる学問である。中学時代に自分のために高い知性を身につけることが大切である。これが最初の校訓である。小学校から勧められてきた自主学習ではあるが、中学生にもなれば、自己管理で信念を持って学習に努めなければならない。人間には個人差がある。それを理解した上で、自分の信念に向かって努力する過程こそが尊いのである。これが2つ目の校訓である。混合教育を通して、お互いを理解するため努力しなければならないという経験を積む。友愛とは、相手の立場を理解して育てていくものである。混合教育を通して、生徒は「真実の愛、真の福祉の心」を育てていく。これが3つ目の校訓である。

武蔵野東中学校の教育目標として、『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』に以下の2点が記されている。

- ① 中学生としての自覚をもたせ、学習・行動・生活のすべてにわたって自主性と責任をもつように指導します。
- ② 高校及び大学、さらに社会生活等の将来を展望し、高校受験を念頭において、自ら学習を企画し、実践し、その成果をまとめていける、自主学習の確立をめざします。⁸⁾

2. 愛知県立東郷高等学校

愛知県立東郷高等学校は、戦後の第二次ベビーブームの生徒達の高等学校進学対策として、1968年4月に開校した。初代校長としてその基礎を築いたのが、酒向健（1918 - 2010）である。酒向健が校長に任命された1968年2月16日の段階では、東郷村（現：愛知県愛知郡東郷町）に開設される初年度は6学級282名の普通科の高等学校であること、及びとりあえず1年間は愛知県立明和高等学校の借用校舎で開校することしか決まっていなかった。酒向健は、事務長に予定されていた伴邦彦と協力して、新入生を迎える4月5日までの48日間で、校舎の整備、中学校の高校説明会、地域関係機関との連絡、校名、校章、教育方針、入学試験、教職員人事、教育課程、教科書、制服、生徒指導、生徒会規約、PTAに関すること、校医、学校に出入りする業者等、すべて滞りなく開校の準備をする必要があった。

（1）教育目標

教育目標である「さとく、ゆたかに、たくましく」には、「全人教育とは知・徳・体、情・

意の教育である」という酒向健の考えが込められていた。

（２）教育方針

酒向健は「普遍なるものは断固として守り抜き、変えるべきものは改変を目指し挑戦」するという考えのもと、学習指導に関しては各種電子教育機器、視聴覚機材を導入した大胆な改革を試みた。その一方、生徒指導に関しては、以下のように従来の伝統に則った考えであった。

・心の問題、徳育については、有史以来、わが国の気候、風土、政治、経済、宗教等諸々の条件を背景に先人が今日まで幾多の葛藤を乗り越えて創り上げてきた神道・仏教・儒教文化、公家・武家・農民・町人文化に加えて、明治以来流入してきた西欧文化を消化して出来た精神文化を評価し、過去のことを深い考察も無く非として捨て去り、伝統的文化を否定しようとする風潮に抵抗して、変えてはならないものは大切にしてい、とりわけ生徒指導については軽々しく歪めることなく、守るべきものは断固として継承していくという指導姿勢をとることを教育方針と決めた。⁹⁾

学習指導に関しては、教員の熱心な研修への取り組みの姿勢が教育関係者の注目を集めた。東郷村に完成した新築校舎には、当時としては最新の教育機器が揃えられ、愛知県では授業改善モデル校として位置づけられた。同校の教育実践は、独自の生徒指導と最新の教育機器を駆使した熱心な学習指導により教育効果をあげ、「東郷方式」として高く評価される一方、生徒指導の極端な一面のみを取り上げて「管理教育」と批判された。以下が、同校における開校４年間の生徒指導に関する教育実践である。

（３）生徒指導

生徒指導に関しては、伝統に培われてきたものを大切にするという考えのもと、「良いことは良い、悪いことは悪いという教育姿勢を堅持していく学校」にしたいというのが、酒向健の考えであった。戦後の学校教育で尊重されてきた自発性や自主性を、軽んじていたわけではないことが、『照一隅 生涯教師の歩み』に記されている。

現代のわが国のような甘い社会環境にあつては、逆説的であるかもしれないが、生徒の自主性を力強く育てる為には、自主性を抹殺するぐらいの強力な指導姿勢に生徒が耐え、考える中でこそそれは根を下ろし育つものであると考えた。しかし過保護の中で知識の修得を中心に育ってきた生徒達には大変苦しいことであつたと思う。¹⁰⁾

１学期半ばから２学期にかけては、生徒指導に関する保護者からの苦情が、校長である酒向健のところに頻繁に届いたという。その度に悩んだ結論が、生徒と教師が深く触れ合う教育によって、教師と生徒が悩みを共有し、それを乗り越えることで理想の教育に到達することがで

きることによってであった。その際、家庭も学校とともに我が子の悩みに真剣に取り組むことが、「生徒の人格転換が成功」する鍵であると考えた。

＜生徒指導の軸＞

酒向健は、明るい中にも厳しさのある学校を目指し、①遅刻厳禁、②身だしなみを良くすること、③挨拶をすることの３点を、指導の軸と考えた。その理由は、「今日一日を充実した過ごし方をする、自らの形成に専念できる幸せを有難いと感じ得る人間であることが、幸せを築くことが出来る基盤であると考えた」¹¹⁾ からである。

＜清掃活動＞

ホームルームの清掃割り当て場所を、全生徒が放課後 10 分で清掃した後、教員による点検を受けて解散する。10 分で清掃が終了していない場所は、翌朝始業前に清掃させる。この 10 分間清掃は、その後愛知県に新設された高等学校で採用された。

＜クラブ活動＞

「学習とクラブ活動は学校教育を支える二つの柱」と考え、3 時間の家庭学習と、少なくとも 2 年間のクラブ活動への参加を求めた。クラブ活動に関しては、「集合を速やかに、短時間に、活動に密度を濃く」を原則とし、授業終了後 15 分（清掃 10 分、集合 5 分）後には、全生徒が所属クラブの指定場所に集合して活動を開始し、練習時間は夏季 1 時間半、冬季 1 時間で、下校時刻はそれぞれ午後 5 時半と 5 時と決めた。

＜集団行動の指導＞

開校後の 1 年間、明和高等学校での仮住まいの為、運動場を利用するのも不自由であった。そこで、6 月より隔週土曜日ごとに東郷に行き、高等学校建設予定地及び東郷製作所のグラウンドにおいて、ホームルーム、体育とクラブ活動（全員がバレーボール）を行った。その体育の時間、号令による集団行動の訓練により、「此の頃の生徒にはみられない整然、かつきびきびした動きが定着」した。

＜林間学校＞

林間学校は、美しい自然環境の中で、鍛錬を中心とした生徒指導を実施することが目的である。「起床から就寝まで生徒には一時の油断も許されない、緊張の連続の 4 日間」の 3 泊 4 日であった。特に初回の食事では、徹底した完食指導がなされた。以後、新入生は上級生から体験談を聞かされ、覚悟をして参加するようになり、「上級生、下級生間の語り伝えの持つ教育力、雰囲気の教育的意義を改めて教えられる思いがした」¹²⁾ と、酒向健が『照一隅 生涯教師の歩み』に記している。

㊦という集団訓練及び林間学校は、開校後の 1 年間、明和高等学校での仮住まいという特殊な環境が契機となって誕生した。その伝統は、東郷高等学校の校舎に移った 2 年目以降も受け継がれた。

東郷高等学校の最初の卒業生の大学進学状況が、入学時に同レベルの学力の高等学校に比べて格段に良いことが注目を集めた。酒向健は「3 年間の学校経営を体験して、学校教育が目指

す成果を収め得るか否かは生徒指導に始まって生徒指導に終わることを痛感した」¹³⁾ という。厳しい生徒指導と熱心な学習指導を行う東郷方式の教育効果が認められ、その後、愛知県内に開校した新設校の間に広まっていった。酒向健は、東郷高等学校における4年間を回顧して、教育実践に関して以下のように記している。

・・実践にあたっては、青少年が侵されてる三無主義（無気力・無関心・無感動）への挑戦を課題として掲げ、生きることとは課題解決の過程と考え、その過程とは「よめ みぬけ しらべよ まとめよ ためせ」の5段階をやり遂げることと教え、成し遂げて得る感動の体験を通じて、生きる力と喜び、根性を獲得させようとひたすら努力してきた。¹⁴⁾

東郷高等学校が誕生したのは、大学紛争及びその影響を受けた高校紛争が終末期を迎え、青少年が「三無主義」と言われる消極的姿勢に陥った時期である。酒向健は、その原因が「目的意識を見失い、情熱を欠き、事に臨んでの批判的、傍観的態度は、成就して悟る感動的体験の欠如にある」¹⁵⁾ と考え、当時の風潮に挑戦するが如く、徹底した生徒指導により生徒の学力を向上させることに成功した。

3. 宮崎県小林市

筆者は、2015年9月、現在日本において唯一現存する准看護師養成所と技能連携した高等学校の定時制衛生看護科を研究するために、宮崎県小林市を訪問した。その際、街で出会った小・中学生の姿勢の良さと、見ず知らずの筆者に対する気持ちのよい挨拶に感動し、同市の教育に興味を持った。早速教育委員会にお尋ねしたところ、「立腰^{りつよう}」を学校教育に取り入れていることや、市独自の「こすもす科」を中心に質の高い小中一貫教育を実施していることを知り、同市の教育に着目するようになった。

（1）立腰

立腰とは、森信三（1896 - 1992）が主体的な人間を育てる土台として提唱した「腰骨を立てる」姿勢である。人間は「心身相即」的な存在であるゆえ、立腰の姿勢によって「強靱な、持続的な意志力を養成する」¹⁶⁾ ことができると考えた森信三は、立腰教育を推進した。

小林市では、基本的な学習習慣の育成と内面的な指導の充実のために立腰指導を導入している。同市では、小学校1・2年生の「こすもす科」で立腰を本格的に学ぶが、小学校に入学する前の幼稚園・保育所・認定こども園から、立腰を導入した指導が行われている。

小学校2年生の「こすもす科」のテキストには、「立腰のよさ」として、「㊤やる気がでる。㊤がんばる心がそだつ。㊤げん気な体になる。」¹⁷⁾ と記載されている。また、教師用テキストには、以下のように記載されている。

立腰指導の効果としては、「心身相即」の精神に表れているように、判断力や実践的知恵の育成や意欲の喚起といった「精神が明瞭になる」こと、集中力の継続、主体性、粘り強さ

といった「主体性が確立する」こと、さらに内臓の圧迫回避、食欲増進、俊敏性といった「健康になる」ことの3点が挙げられる。このように立腰指導による効果は、生徒指導・学習指導、体力・健康教育にまで波及すると言える。¹⁸⁾

筆者は、2016年3月16日に小林小学校を訪問し、授業は立腰と黙想で始まること、児童の姿勢が良いこと、及び授業に集中している様子を見学してきた。清掃も、立腰と黙想で始まり、無言で黙々で行っていた。

同市は、児童・生徒に立腰の姿勢を習得させることにより、集中して授業を受けること、挨拶や返事をする、整理整頓、きまりを守ること、身だしなみを整えること等の「けじめある行動」ができるようになると考えている。子ども達は立腰の姿勢を実践することにより、知育、徳育、体育を含む人間形成の土台を築くことができる。

(2) こすもす科

小林市では、2009年度(2010年3月23日に小林市と野尻町が合併したため、野尻町区は2011年度)から小林地区全小・中学校で、小中一貫教育を導入し、同市独自に「こすもす科」を創設して、教育が行われている。同科の内容は、小林市民に必要な資質や能力を身に付けさせ、自分自身や郷土に自信と誇りをもって生きていく人間の育成を目指している。

「こすもす科」は、基本的な生活習慣の習得等の自分自身に関わる自分領域、人との関わりで必要なコミュニケーション能力の習得をはじめとする他者領域、地域の伝統や文化、自然などを学び、将来の自分の生き方を考える社会領域の3領域で構成されている。「こすもす科」のテキストの「はじめに」には、子ども達に対する願いが記載されている。学年により表現が異なるが、中学校第2・3学年用には、以下のように記されている。

コスモスは、小林市を象徴する花であると同時に、可憐で美しい花でありながら、厳しい自然環境の中でもしっかりと根を張り、雑草のように強く伸びていく花です。

「こすもす科」の学習をとおして、みなさんがコスモスのようにたくましく生きて欲しいという願いを込めて、「こすもす科」という名前をつけました。

コスモスのように、大地にしっかりと根を張り、自分のもっているすばらしさを大きく花開かせることができるように、先生や友達と楽しく「こすもす科」の学習が進められることを願っています。¹⁹⁾

「こすもす科」の中学校第3学年用の最後に「夢に向かって」という単元がある。生徒達は、将来就きたい職業及び入学を希望する高等学校についての調査・検討を4月から始め、最終的には自分の学力等を考慮した現実的な進路計画を立てて、希望進学先を決定する。

義務教育を終えた後、全員が進学するわけではない。「こすもす科」では、義務教育を終了するまでに、子ども達に社会人として必要な能力を身に付けさせている。自分領域では、自主

的な家庭学習を習慣化させ、家庭での役割分担を果たし、家事に必要な知識や技能を獲得し、正しい経済感覚と情報機器の操作を身に付け、将来、社会人として自立できる準備をさせている。他者領域では、社会性を育み、社会人として他者と関わることができる基礎的能力を身に付けさせている。そして社会領域では、小林市の未来予想と自らの進路決定をすることで、卒業後の自らの歩みを考えさせている。

（３）教育機関と家庭と地域の連携

子ども達は学校だけで学んで、大人になっていくわけではない。授業という形式では学校教育が中心ではあるが、家庭と地域社会でも様々なことを子ども達は学んでいる。子ども達は、家庭や地域社会で様々な人と接し、様々な体験をすることで、社会性及び学校では学習することができない知識・技能を身に付け、将来の夢や希望を育んでいく。

小林市では、市民一人ひとりの自己実現を目指した「0歳から100歳までの教育プラン」のもと、「学びたい」、「学ばせたい」気持ちを高める教育の取り組みを行い、学校、家庭及び地域住民等が相互に連携協力している。同市は、「市民一人ひとりが生きがいをもち、心豊かで充実した人生を送ることができるように人と人との連携や世代間の交流を深めるとともに、生涯にわたって学ぶことの喜びが味わえるような教育的環境を整備する必要がある」²⁰⁾と考えている。

例えば2013年度より同市では、市内全公立小・中学校に学校運営協議会を設置し、学校運営に保護者と地域住民の考えを反映させている。そして、学校教育を充実させるために、家庭と地域との連携に取り組んでいる。具体例として、西小林小学校では、放課後に地域住民が児童の勉強を指導する「寺子屋」と、住民がお茶を飲みながら談笑することができる「茶飲ん場」が開設された。「寺子屋」は図書室を、「茶飲ん場」は生活科室を利用して、月1回同日開催されている。「茶飲ん場」には、児童が休み時間に遊びに来て、高齢者とあやとりやお手玉などをして交流を楽しんでいる。「寺子屋」では、放課後、児童が地域住民に勉強を教わる。どちらも、小学校が地域住民の交流拠点となっている。

児童は、「茶飲ん場」では高齢者に遊んでもらい、「寺子屋」では学校の授業だけではわからない勉強を地域住民に教えてもらう。「茶飲ん場」においても「寺子屋」においても、児童は学校の教員でも家族でもない大人と接することで、目上の人に対する礼儀作法等を自然と学ぶことができる。あやとりやお手玉など、高齢者が伝承遊びの技を披露してその秘伝を教えることで、児童には高齢者を尊敬する気持ちが生まれる。特に高齢者と接する機会の少ない核家族の児童には、高齢者と接する良い学びの場となると考えられる。

子育てに関して危機的な状況にある今日、私たちは一人一人が意識改革を行い、「学びたい」とともに「学ばせたい」という思いで生活することが大切である。小林市教育委員会は、「0歳から100歳までの小林教育プラン」をスローガンに、全世代の教育改革を目指している。「学びたい」、「学ばせたい」という考え方のもと、次々と実現している同委員会の様々な新たな試

みは、個人では難しい教育に対する意識改革の起爆剤となって全市民を変えていくと期待される。

（４）キャリア教育の推進

小林市は、学校の枠を超え、様々な世代や職業の人との交流により子ども達のコミュニケーション能力を高めると共に、将来に向けて必要な能力をどのように獲得していくかというキャリアプランニング能力を育てている。

＜小林市キャリア教育支援センター＞

同市は、2017年5月25日、市内の小学校・中学校・高等学校と地元企業の連携を促進することを目的に、小林商工会議所に「小林市キャリア教育支援センター」を設置した。センター内のキャリア教育コーディネーターは、事業に賛同する企業を発掘して、学校と企業の橋渡し役を担っている。

中学校において、企業が進路選択を考えるキャリア教育を実施したり、小林中央公民館で「小林近未来ハイスクール」を開催して、中学生・高校生と社会人（会社員、自営業者、行政関係者）が、将来の職業や暮らしについて語り合い、希望する職業や理想とする生活を発表させる等、様々な企画を実現している。

＜TENAMU 交流スペース＞

2017年12月に完成したまちなか複合施設「TENAMU ビル」の2階に小林市が開設したTENAMU 交流スペースは、乳幼児から高齢者まであらゆる世代の交流拠点となる場所で、「木育スペース」、「まちライブラリー」、「フードラボ」の3エリアに分かれている。

「木育スペース」は、親子（乳幼児）で遊ぶことができる子育て支援スペースで、子どもの5感に働きかける木の玩具と木の香りで、親子がリラックスできる空間になっている。「まちライブラリー」では、市民から寄贈された3000冊の本を自由に閲覧でき、1回1人2冊まで貸りることができる。本にはメッセージカードが挟まれ、本を通した交流ができるようになっている。「フードラボ」は、調理器具が完備されたキッチンで、料理教室や六次産業化による商品開発などで活用できる。

筆者は、2018年3月11日に、TENAMU 交流スペースを訪問した際、「木育スペース」は多くの親子連れで賑わい、「まちライブラリー」では韓国語講座（13時30分～15時）とスピリチュアル占い（13時～16時）が無料で開催されていた他、学生が一人で勉強している空間、小・中学生等が友達と本を読みながら談話している空間、親子3代でテーブルを囲んでいる空間、楽器を弾くことができる空間、中学生～若者が集まって学習会をしている空間等が自然に混在していたことを目にした。

おわりに

以上の教育実践の共通点は、子ども達の未来を考えて親又は生徒指導に重きを置き、規則正しい生活習慣と学ぶ姿勢を身に付けさせていることである。そして、それにより、素晴らしい

学習効果をあげている。

貧困対策研究の先駆的研究といわれる「ペリー就学前計画」(Perry Preschool Study)では、貧困家庭の3・4歳児の子どもに2年間実施された非認知的能力の開発を目指す幼児教育の成果として、大学への進学率が高く、就職状況が良く、問題行動も少ないことが明らかにされた。

“三つ子の魂百まで”という言葉がある。それは、幼少期に形成された性質は、その後の教育や経験の影響を受けて変わるようなものではないという意味である。幼い時期であるなら容易に身に付けることができる性質も、一度身に付けたら変えることは極めて困難である。

愛知県立東郷高等学校が、「軍国主義教育」と言われたほど厳しい生徒指導を行ったのは、その為である。高等学校に入学するまでの15年間で身に付けた生活習慣や学ぶ姿勢を改めるためには、極めて厳しい指導が必要であった。しかしその成果として、学習指導の効果が認められたことは、15歳になっても手遅れではないということを証明している。

他方、武蔵野東学園や小林市は、幼稚園、小学校から指導を始めるために、厳しい指導をする必要はなく、子ども達が容易に理想とする生活習慣や学ぶ姿勢を獲得することができる。

教育基本法第10条では、家庭教育の役割として「生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図る」ことをあげている。また同法第11条には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と記されている。

家庭及び社会の教育力が低下したことにより、子ども達の社会性や精神的な発達が拒まれ、自己中心的な考え方、忍耐力不足、規範意識の欠如などが、問題になっている。現在の教育成果も大切であるが、人工知能時代の到来が現在の今日、偏差値で評価できる認知的能力より、非認知能力の育成が大切になっている。家庭教育及び幼児教育そして小学校教育こそ、子ども達の成長の土台作りの場である。基本的な生活習慣と学ぶ姿勢を身に付けさせることができれば、それを土台に子ども達は自らが必要とする学習に専念し、未来を切り開いていくことができるであろう。

教育は、子ども達が社会人として巣立っていくために行われるものである。社会人として必要なのは学力だけではない。子ども達が将来、社会人として活躍するために必要な非認知能力を育成するためには、家庭では躾を、学校教育では生徒指導を重視していかなければならない。

注

- 1) 2013年に改訂されたDSM-5(『精神疾患の分類と診断の手引き』第5版)では、自閉症、アスペルガー障害、非定型の広汎性発達障害、小児崩壊障害を包括して、自閉症スペクトラム障害の呼称に統一されることとなった。本稿では、武蔵野東学園が用いている自閉症、自閉症児という用語を使用する。
- 2) 一般的にはインクルーシブ教育といわれるが、本学園では、幼稚園開園当時から使用している混合教育という表現を現在でも用いている。
- 3) 武蔵野東教育研究所『北原キヨの混合教育・生活療法への道—自閉児と健常児の教育に捧

- げた生涯一』学苑社、2000 年、133 頁。
- 4) 北原キヨ『可能性を求めて ― 武蔵野東幼稚園から小学校へ』たいまつ社、1977 年、56 頁。
- 5) 同上書、86 頁。
- 6) 武蔵野東教育研究所、前掲書、141 - 142 頁。
- 7) 北原キヨ『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』、明治図書出版、1983 年、14 頁。
- 8) 同上書、169 頁。
- 9) 酒向健『照一隅 生涯教師の歩み』2005 年、196 頁。
- 10) 同上書、259 頁。
- 11) 同上書、210 頁。
- 12) 同上書、253 頁。
- 13) 同上書、303 頁。
- 14) 同上書、394 頁。
- 15) 同上書、261 頁。
- 16) 森信三『立腰教育入門』1979 年、44 頁。
- 17) 小林市教育委員会『こすもす科小学校第 1・2 学年【改訂版】』2012 年、17 頁。
- 18) 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き I 【改訂版】小学校 第 1・2 学年用』2012 年、42 頁。
- 19) 小林市教育委員会『こすもす科中学校第 2・3 学年【改訂版】』2012 年、17 頁。
- 20) 小林市教育委員会『『0 歳から 100 歳までの小林教育プラン』策定の趣旨』、「平成 28 年度 0 歳から 100 歳までの小林教育プラン」。

参考文献・資料

1. 宇治芳雄『禁断の教育』汐文社、1981 年。
2. 北原キヨ『可能性を求めて ― 武蔵野東幼稚園から小学校へ』たいまつ社、1977 年。
3. 北原キヨ『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』明治図書出版、1983 年。
4. 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き I 【改訂版】小学校 第 1・2 学年用』2012 年。
5. 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き II 【改訂版】小学校 第 3・4 学年用』2012 年。
6. 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き III 【改訂版】小学校 第 5・6 学年用 中学校 第 1 学年用』2012 年。
7. 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き IV 【改訂版】中学校 第 2・3 学年用』2012 年。
8. 小林市教育センター『『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育の実現 ～自ら課題に気付き、協働で解決する力を高めるキャリア教育の推進』2018 年。

9. 酒向健『実践に基づく学校経営論』1998 年。
10. 酒向健『照一隅 生涯教師の歩み』2005 年。
11. 酒向健・都築亨編著『特別活動を学ぶ』福村出版、1991 年。
12. 寺田清一『森信三先生 立腰教育入門』1979 年。
13. 日本財団 子どもの貧困対策チーム『徹底調査 子どもの貧困が日本を減ぼす 社会的損失 40 兆円の衝撃』文藝春秋、2016 年。
14. 武蔵野東教育研究所『北原キヨの混合教育・生活療法への道 ―自閉児と健常児の教育に捧げた生涯―』学苑社、2000 年。
15. 文部科学省『生徒指導提要』2010 年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm(2020 年 1 月 15 日取得)。